

Title	酒呑童子伝説の地域的展開：首塚大明神の生成と変容
Sub Title	The local development of the legend of Shutendoji: formation and transformation of Kubitsuka Daimyoujin Shrine
Author	Kozhurina, Elena
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.71 (2011.) ,p.119- 134
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper is a study of the Shinto shrine called Kubitsuka Daimyoujin which is located in the Nishikyo-ku ward in the city of Kyoto, in Kyoto prefecture. This small shrine is standing in the abandoned place and looks as a forgotten one, but it is preserved by several people, the descendants of those families, who were managing tea stalls and Japanese-style hotels in the neighborhood several hundred years ago. Moreover, there is an annual festival being held on the 15th of April, which gathers about 80 people, including visitors from other prefectures close to Kyoto. The name of the shrine can be translated as "The Shrine of the Great Deity of Head Mound". There is a mound on the back of the small shrine and the legend says that the chopped head of the terrible ogre, Shutendoji, is buried here. Shutendoji and his dependants lived in the mountain Oe and were bothering people of Kyoto by robbery and kidnapping, but were subjugated by military commanders Minamoto no Yorimitsu, his subordinates and Fujiwara no Yasumasa. The group of Yorimitsu took the chopped head of Shutendoji to transport it to the capital as an evidence of victory, but the Koyasu Jizo Bodhisattva on their way told them that such impure thing as an ogre's head shouldn't be shown to the Emperor, and the head suddenly became too heavy, so they had to bury it. The place they buried it is exactly the mound of Kubitsuka Daimyoujin, where Shutendoji is worshipped as a deity healing illnesses concerning head and brain and also as a deity of scholarship.</p> <p>The legend of Shutendoji tells us about the times of the Heian period, but it is thought that the legend itself formed later, in Kamakura period. However, it is not clear when the head mound and the shrine appeared, and the episode concerning the buried head is not mentioned in the texts until the end of seventeenth century. The aim of this paper is to find what was in the background of forming the legend about the buried head and constructing the shrine. Through analyzing the strong connection of the shrine with such believes as the deity of borders Dosojin, the guardian deity of children Jizo and the other world, I'm making a conclusion that the legend of the buried head came out as a result of concentrating and transformation of these believes.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000071-0119

societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

酒呑童子伝説の地域的展開

——首塚大明神の生成と変容——

The Local Development of the Legend of Shutendoji

—Formation and Transformation of Kubitsuka Daimyoujin Shrine—

コジューリナ・エレナ*

Kozhurina Elena

This paper is a study of the Shinto shrine called Kubitsuka Daimyoujin which is located in the Nishikyo-ku ward in the city of Kyoto, in Kyoto prefecture. This small shrine is standing in the abandoned place and looks as a forgotten one, but it is preserved by several people, the descendants of those families, who were managing tea stalls and Japanese-style hotels in the neighborhood several hundred years ago. Moreover, there is an annual festival being held on the 15th of April, which gathers about 80 people, including visitors from other prefectures close to Kyoto. The name of the shrine can be translated as “The Shrine of the Great Deity of Head Mound”. There is a mound on the back of the small shrine and the legend says that the chopped head of the terrible ogre, Shutendoji, is buried here. Shutendoji and his dependants lived in the mountain Oe and were bothering people of Kyoto by robbery and kidnapping, but were subjugated by military commanders Minamoto no Yorimitsu, his surbodinate and Fujiwara no Yasumasa. The group of Yorimitsu took the chopped head of Shutendoji to transport it to the capital as an evidence of victory, but the Koyasu Jizo Bodhisattva on their way told them that such impure thing as an ogre’s head shouldn’t be shown to the Emperor, and the head suddenly became too heavy, so they had to bury it. The place they buried it is exactly the mound of Kubitsuka Daimyoujin, where Shutendoji is worshipped as a deity healing illnesses concerning head and brain and also as a deity of scholarship.

The legend of Shutendoji tells us about the times of the Heian period, but it is thought that the legend itself formed later, in Kamakura period. However, it is not clear when the head mound and the shrine appeared, and the episode concerning the buried head is not mentioned in the texts until the end of seventeenth century. The aim of this paper is to find what was in the background of forming the legend about the buried head and constructing the shrine. Through analyzing the strong connection of the shrine with such believes as the deity of borders Dosojin, the guardian deity of children Jizo and the other world, I’m making a conclusion that the legend of the buried head came out as a result of concentrating and transforma-

* 慶應義塾大学大学院博士課程

tion of these believes.

Key words: Kubitsuka Daimyojin Shrine, Shutendoji, *oni* (ogre), legends, Dosojin (a deity of borders), Ekijin (a deity of epidemics), *kubitsuka* (head mound), other world, Jizo (a guardian deity of children).

はじめに

本稿は日本の中世に成立し、絵巻の『大江山絵詞』（南北朝・室町初期成立）や『御伽草子』（室町後期）などで伝えられてきた酒呑童子¹⁾伝説に関連する旧跡の一つで、「酒呑童子の首塚」とも言われる首塚大明神についての考察である。首塚大明神は、京都府京都市西京区大枝沓掛町の旧道沿いの老ノ坂にたたずむ祠で、酒呑童子の住処と伝えられる大江山の伝承地のうちの一つである。酒呑童子に関する研究は既に膨大な数にのぼっているが²⁾、本稿では文献と伝承を用いて、老ノ坂の首塚大明神に関わる酒呑童子伝説を中心として、伝承の展開、生成と創造へと向かう諸相を民俗学的に検討する³⁾。

1. 酒呑童子伝説

首塚大明神について述べる前に、酒呑童子伝説に関する一般的な紹介を行う。

酒呑童子の話の典型と言えるものは享保年間（1716-1736）に大坂の板元洪川清右衛門が刊行した『御伽草子』に収められている。洪川板『御伽草子』は、主に室町時代から江戸時代にかけて成立し、高価な写本で伝わっていた二十三編の物語を大量生産可能な印刷本の形で世に出し、広く流通させた。本書所収の「酒呑童子」は一条天皇の時代（986-1011）に、人さらいをしていた丹波国大江山の鬼であった酒呑童子とその眷属を、勅令を受けた源頼光（頼光）、藤原保昌と頼光四天王（碓井貞光・卜部末武・渡辺綱・坂田公時）が、神仏の力を借りて、お酒で酔わせて退治する話である。複製技術の力で酒呑童子伝説は多くの人々の知る物語となった。

現存する酒呑童子伝説を記した初出の史料は逸翁美術館蔵の『大江山絵詞』絵巻で、成立年代は南北朝・室町初期と推定されている。しかし、酒呑童子説話の原型と言える説話群の形成期はさらに遡って、鎌倉時代とされる。室町時代までの作品で、残るものは少ない。しかし、『大江山絵詞』以降、近世に入って作られた「酒呑童子」絵巻・絵本で今まで残っている作品は八十余り数えられる⁴⁾。酒呑童子の退治譚は、演劇として、能、歌舞伎、人形浄瑠璃で演じられ、浮世絵や草双紙などの作品の素材となった。酒呑童子の話は近代や現代でも様々な形で伝えられ、童謡唱歌、映画、小説、コミックなどの素材になっている。

酒呑童子の住処については、丹波国や山城国の大江山とする大江山系統の他に、近江国に聳える伊吹山とする伊吹山系統もある⁵⁾。伊吹山系統で最古とされるのはサントリイ美術館所蔵『酒伝童子絵巻』（室町時代）である。また、酒呑童子の住処を大江山とするが、詞書と挿絵が伊吹山系統になっている作品もあり、系統を定めることが難しい場合がある。また同じ系統の中でも、作品によって詞書と挿絵に相異が見られる。また、茨木童子の伝承では、越後に関わるものもある。それは新潟県燕市の分水地区（旧西蒲原郡分水町）には伝わる酒呑童子伝説の前日譚である。『新潟県伝説集成』収録の伝説では[小山1996: 182-183]、酒呑童子の母親が、妊娠中に砂子塚の近くを流れる伊佐々川に住む頭に瘤のある魚、杜父魚（トチとも呼ばれる魚で、妊婦が食べると生まれた子は男なら大盗賊、女なら淫婦にな

ると言われる)を食べたために、酒呑童子は母親の胎内に一年六ヶ月も宿り、腹を蹴破って出たのである。生まれてすぐ歩き、言葉も分かるなど天才だったが、乱暴者で、子供ながら大酒を飲み、女に手を出したりしていた。国上寺の稚児になってからは、乱暴を慎んでいたが、美男子だったため村娘から大量に届いていた恋文を整理しようとしたとき、異様な煙に包まれ、鬼の顔になった。後に茨木童子などの部下を集めながら、丹波の大江山に渡り、源頼光等に退治された⁶⁾という。地元の分水町は燕市との合併に際して、酒呑童子伝説を利用したイベントを開催し、現在も継続している〔コジューリナ2009〕。

京都府には二つの大江山がある。山城と丹波の国境に当たる京都市西京区と亀岡市の境にあたる老ノ坂(大江の坂)の南に聳える大江山(大枝山、大井山。標高480メートル)と、もう一つは、丹後と丹波の国境の近くの京都府北西部で千丈ヶ嶽を主峰とする大江山連峰(旧大江町・現福知山市)である。現在では、一般的に酒呑童子の山と思われているのは後者で、大江山連峰周辺や近くの三嶽山周辺には、酒呑童子関連の伝説と旧跡が豊富に残っている。現在は伝説を覚えている人が少なくなり、旧跡の状態も良好ではない場合が多いが、大江町の鬼による町造りが試みられはじめた1980年代には大江町役場の職員が積極的に長老の聞き取り調査を行い、多数の伝説を集めることができた⁷⁾。これらの伝説は文献で知られる酒呑童子説話を補助するようなものが多く、頼光等が鬼退治への途中祈願した神社や泊った家などについて伝えている。

古代・中世における大江山は一般には元々は、都に近い京都市西京区と亀岡市の境に位置する大江山(大枝山)を指していたと考えられ、酒呑童子の住処とされるのも同所であるという説もある〔高橋2005(1992)など〕。首塚大明神は京都に近い大江山(大枝山)の北をたどる坂道の老ノ坂沿いであり、本稿での大江山伝説もこの祠について述べることになる。ただし、丹波・丹後の大江山とも伝説では繋がりを持っている。一方、首塚大明神は円墳の上に建てられているともいわれ、古墳の可能性が高く、元々は古代の埋葬地であったと思われる、首塚の伝説はその基盤の上に生成されたのであろう。周辺では古墳時代後期の大枝山古墳群(御陵大枝山)が発掘されるなど、古い歴史を持つ。

2. 首塚と子安地藏

酒呑童子伝説を伝える最古の絵巻『大江山絵詞』には酒呑童子の首塚のことは何も書かれていない。頼光等が鬼の首とともに都に凱旋し、首は宇治宝蔵に納められたとある。

「(…)撰津主頼光、丹後守保昌、鬼王の頸を、隨身して、都へ入由(…)彼頸をは、宇治の宝蔵にそ、納られける」〔横山1976: 139〕

伊吹山系統のサントリー美術館所蔵『酒伝童子絵巻』にも首を持って凱旋する場面があって、ほとんどの文献には首を退治の証拠として持ち帰るという設定になっている。首塚の伝説は口頭で伝えられていたのだろうか。

しかし、天和元年(1681)頃の成立の通俗史書『前太平記』には、酒呑童子とその部下の鬼退治に源頼光とその長男、頼国が参加し、酒呑童子の首を京に持ち帰り、鉄の串に挿して油子路を引き渡し、三条河原に晒したが、やはり奇怪の者の首を都に捨ててはいけないということで、老ノ坂峠までかえして埋めたとある。また、享保4年(1717)に亀山の俳人下山求魚・本山淡水が書いた『盞魚』では、千

丈ヶ嶽で退治した酒呑童子の首を京に帰る途中、老ノ坂に埋めたと書いている。老ノ坂峠が京都という王様の所在地にとって周縁の地、境界の地であって、まがまがしいものを追いやる場所とされていたことがわかる。

元禄2年(1689)に丹後・若狭・近江の旅をした貝原益軒は「大江の坂の嶺より^{いささか}少西に、地藏堂有。其側に亀山城主の休所あり。地藏堂の小北に山城丹波の境あり。嶺より京都及山城諸山^{よく}能見えて、佳景也。地藏堂の西南に、一村(群)の松林あり。是、酒顛童子が首塚なりと俗にいへり」[『諸州めぐり西北紀行』巻上]と書いて、当時この場所は、すでに酒呑童子の首塚と伝えられていたこと、近くに地藏堂があったことを記録していた。元禄年間の調査をもとに書かれた『山州名跡志』巻九(正徳元年・1711)⁸⁾には、「大枝山大福寺」の名をあげて「在峠、堂(北向)、本尊地藏菩薩(坐像二尺一寸)、作慧心僧都、云世子安地藏是也」とあり、子安地藏で妊婦の安産や子どもの守護を願ったと推定される。天明7年(1787)刊行の『都名所図会拾遺』巻三には地藏堂の横に休所の建物が描かれている。首塚大明神の伝承では、地藏の所在が重要で、他界との接点にあたる境界の場所が首塚と結び付けられていたことが分かる。地藏堂についての記録は、貝原益軒の元禄2年(1689)の紀行が所見であり、この地がこの世とあの世の境界であるという意識は明確である。

首塚のことは、丹波亀山(亀岡)藩士の矢部朴斎が文化5年(1808)から天保15年(1844)にかけて編んだ地誌『桑下漫録』前編五が『盃魚』や『近世叢話』を引いて記している。

一 首塚 俚俗酒呑童子の首塚也と云、酒を供て頭痛祈、

盃魚 正暦元年三月廿四日、下野判官頼国千丈嶽酒顛童子退治して、首を京に為持、鉄の串にさして油小路を引渡し、三条河原に晒されしか、奇怪の者の首洛中に捨られんハいかゝとて、此所迄かへして埋られしとぞ、童子か首引渡されし事、前太平記に見ゆ、

近世叢話 上略 大江坂の西、沓掛村端に、酒呑童子か首塚と云ものハ、桓武天皇の御母高野氏贈后太皇宮の御しるしなり、

右ハ何ニ拠て如是書るやしらねとも、或人も童子か首塚信難、御陵ならんと云り、如何にも右書ニ出処信用せらる、則京ニ行右の方ニて巡り百四五十間斗もあらん、築上て上にハ古樹茂、小キ祠有、此祠ハ五十年斗^{ばかりいぜん}已前ニハ無之様^{これなきようおぼゆ}覚、近年の事成へし、其様子御陵と見ゆ、又沓掛村の西ニ、田の中ニ大石をつミしもの有、是を右の本ニハ云哉と、村老に尋しに、童子の事ハ不云、昔よりたゞ塚とのミ云とかや、隣村塚原ニも大石をつミし所有、是もただ塚と云、何の塚と云事不知」[亀岡市史編さん委員会1996:644]

「酒を供て頭痛祈願」とあるように、酒呑童子の好物の酒を供えて、頭痛がなおるように祈るという習俗は、現在の伝承との連続性がみられる。矢部朴斎は『前太平記』に書かれた首塚に関する記述は信じがたいと述べていて、これは桓武天皇の母の墓ではないかと考えている。首塚の近くに小さな祠があるが、近年できたもので、50年前にはなかったという。周辺には同じような塚があるが、それはただの塚で、首塚と信じている人が一人もいないと述べている。ここでは、首塚は御陵と結びつけられて、そこに高貴な方が葬られているという伝承が加わる一方で、ただの塚に過ぎないという醒めた言い方もしている。要するに、全ては伝承の世界で確実なことは何も無いが、墓や祠の持つ意味は増殖した。たしかに、古墳の可能性もあり、埋葬者は不明だが、高貴な方の墓という伝承も頷ける。

大江町の鬼ヶ茶屋発行の『大江山千丈ヶ嶽 酒呑童子由来』（作者、絵師不明・榊屋卯右衛門版・弘化2年〈1845〉以降）は、千丈ヶ嶽での酒呑童子退治と老ノ坂にある首塚大明神を結びつけて酒呑童子説話を書き直している。鬼ヶ茶屋の建物は現在でも残っているが、営業していない。『酒呑童子由来』はお土産として売り出すために発行された冊子で、これによると切られた酒呑童子の首が焔を吹きながら都の方へ飛んでいったが、老ノ坂へ落ちた。その首を七条河原に七日晒し、老ノ坂に葬った。そして、首塚明神と名付け、地藏堂を建てたという。この段階では伝承は次第にもっともらしい話に変わっている。

『桑下漫録』（1808-1844）には、首塚の祠ができたのは「五十年前」と書かれているので、祠の建立は早くとも1750年代に行われたということになる。塚自体はさらに昔からあったのであろう。すでに触れた『前太平記』（1681）、貝原益軒の『諸州めぐり西北紀行』（1689）などではこの塚が酒呑童子の首が埋められたと伝えられると言われていて、この塚は少なくとも元禄時代前後にはすでに酒呑童子伝説と結びつけられていたと言える。

すでに述べたように、酒呑童子説話を記録した絵巻『大江山絵詞』を初めとする数々の酒呑童子関連の文献には、酒呑童子の首が老ノ坂に埋められたことは触れられていないが、はねられた首が一度空に舞い上がり、頼光の兜に食い付いたと書かれているので、酒呑童子の首が空を飛ぶという場面が首塚大明神由緒の伝説に使われているのもおかしくない。もっとも、切られた首が飛ぶモチーフは、他の伝説でも語られ、飛んだ首が落ちた場所は首塚として祀られる。例えば、東京都千代田区大手町には平将門の首が空中を飛んで落ちたとされる首塚があり、この一画だけがビルの谷間に取り残されている。説明板には、天慶の乱で死んだ「将門の首級は京都に送られ獄門に架けられたが三日後白光を放って東方に飛び去り武蔵国豊島郡芝崎に落ちた。大地は鳴動し太陽も光を失って暗夜のようになったという。村人は恐怖して塚を築いて埋葬した。これ即ちこの場所であり将門の首塚と語り伝えられる。」とある。平将門のように朝廷に対して叛乱を起こして脅かすような強い力を持った武将は、死後も恐るべき力を発揮すると信じられていた。酒呑童子は伝承中の存在であるが、原型になる盗賊や英雄のモデルはあり、人々から恐れられると共に通常とは違う霊力の持ち主とされる両義性を帯びていたのであろう。

首塚の伝承と前後して近世初期の17世紀には子安地藏尊の由来譚も成立していた。『山州名跡志』巻九の「大枝山大福寺」の項には、難産で亡くなった市森長者の娘の桜姫という女性が僧侶の夢枕に立って、ここに地藏菩薩像を造って安置すれば、安産を保証すると言った。そこで「此故ニ彼女塚ヨリ生ズル処ノ栢ヲ以テ、地藏菩薩像ヲ造リ、一字ノ堂ヲ建テ安置セリ。今像是ナリ。又今世当堂ニ於テ松木ヲ削与テ、産女ノ口ニ啞シムルニ、平産スルコトハ、僧都本尊造立ノ時其木端ヲ産婦ニ与ユルニ、平産ヲナセン因縁トイフ」とある。『都名所図会』も同様で、「むかし市盛長者というふもの一人の娘あり。難産にかかりて空しくなる、恵心僧都此所に宿し持念観法の時、かの女顕はれ出で、冥土のくるしみを救ひ給へと願ふ。僧都いろいろの法門を説き給へば、女いふやう、もはや苦患をまぬかれたり、我が誓ひに永く産婦の難死を救ふべきなり、地藏尊を作ってここに安置し給へと言ひ終わって去りぬ。此ゆゑにかの女の塚にし生じたる栢樹を伐って地藏尊を作り、一字の堂を建てて安置せり。今の本尊これなり」という⁹⁾。栢から地藏像を作って拝み、松の木の木端を飲んで安産祈願をするという民間信仰の祈願対象であった。地藏菩薩像は平安中期の天台宗の学僧、えしんそうぎぼんしん恵心僧都源信の造像という権威性を帯びた伝承になっている。

老ノ坂の首塚大明神の伝承は、峠や坂という境界にある場所性を根源において、その上に古墳、御

陵、塚などの死者に関わる他界との接点の意識が加わり、子どもは他界から齎されると考えられて子安地藏の安産祈願の場所になり、さらに酒吞童子の首に関する伝承が習合した。老ノ坂をめぐるのは、古代の埋葬地、峠や坂という場所性、他界との接点、首という四層の伝承があり、そこに王権の所在地である京都との関係から、けがれやまがまがしいものを止めておく場所としての性格が混濁したことがわかる。

子安地藏は首塚より少し京都の方へ行った峠道の旧道の地藏堂に納められていたが、峠町が明治初年に不時の大火に見まわれ、旧道は主要な街道から外れて旅籠や商店は廃れてしまうなどの変転の中で、地藏堂は明治末年に旧トンネルの松風洞（明治15年完成）の西側に移され、昭和初年に東側に移動した。その後、昭和9年に新トンネルが完成し、昭和41年（1966）に最新の老ノ坂隧道が完成し、現在の地藏堂はトンネル東口のバス停近く、国道第9号線沿いにある。実は子安地藏そのものは明治8年（1875）の京都博覧会に出品されたままで、会期終了後も返還されず、昭和34年（1959）になってようやく元に戻ったのだという〔大島2008b: 20〕。「峠の地藏」は王子村（亀岡市）と沓掛村（京都市）が半月交代で管理していたが、返還に際して共に譲らずに揉めたためだとされる。毎月24日朝には篠町の如意寺の住職にお経を読んでもらうという。8月23日の地藏盆には沢山の提灯をつけて飾ってお菓子やジュースを配る。妊婦が腹帯を巻くときには、地藏にお参りして、管理人の奥さんに安産祈願をしてもらい、御札（女人泰産・身体具足・大江山大福寺・老ノ坂峠と書いてある）を受けていたというが、平成18年（2006）までで終了した。

3. 首塚大明神の例祭

首塚大明神は、京都市西京区大枝沓掛町（26番122）、老ノ坂峠に位置し、山城と丹波の国境碑の近くにあり、「酒吞童子の首塚」「首塚さん」とも呼ばれている。地図にはただ「首塚」と記されている。老ノ坂の旧道の脇に入ると、巨木の杉がたくさん茂る鎮守の森が見え、その奥に小社（小祠）がある。周辺は人通りが少なく、高い木々で昼間でも薄暗い。鳥居をくぐって、石造りの階段を上ると、もう一つの鳥居があって、酒吞童子の大好物のお酒が供えてある小さな祠が建っている。高さ1メートルぐらいの塚自体は祠の後ろにある。上った道の反対側から降りると、首塚大明神社務所があって、普段は社務所に誰もいない。

祠の横にある説明板には次のように書かれている¹⁰⁾。

由緒

平安時代初期（西暦八百年頃）丹波の国大江山に本拠を構えた酒吞童子が、京の都へ出て金銀財宝や婦女子をかどわかすなど悪行の数々を行うので、人々の心に大きな不安を与えていた。天子（天皇）は源頼光等四天王に命じ酒吞童子とその一族を征伐するよう命じられた。源頼光等は大江山の千丈ヶ嶽に分け入り、苦心の後、酒吞童子とその一族を征伐し、酒吞童子の首級を証拠に京の都へ帰る途中この老ノ坂で休憩したが、道端の子安の地藏尊が「鬼の首のような不浄なものは天子様のおられる都へ持ち行くことはならん」と云はれたが、相模の国の足柄山で熊と相撲を取ったという力持ちの坂田の金時が証拠の品だから都へ持って行くと言って、酒吞童子の首を持ち上げようと力んだが、ここまで持ってきた首が急に持ち上がらなくなった。そこで一行は止むを得ずこの場所に首を埋めて、首塚をつくったと伝えられる。酒吞童子が源頼光に首を切られるとき、今までの罪を悔い、これからは首から上に病をもつ

人々を助けたいと言い残したと伝えられ、首塚大明神は首より上の病気に霊験があらたかである。

昭和六十一年三月 宗教法人 首塚大明神社務所

源頼光等が丹波と丹後の国境の近くの千丈ヶ嶽のある大江山連峰で酒呑童子を退治し、はねた首を証拠として都に持ち帰ろうとしたが、峠の子安地蔵が不浄な首を天子のいる都に持ち込むなどといった。坂田金時が持ち上げる試みをしたが持ち上げられず、そこに埋めるしかなかった¹¹⁾。そして、酒呑童子が源頼光に首を斬られる時、罪を悔い改めて、病をもつ人々を助けたいと言い残したという最後の一念によって、首より上の病気（頭痛や脳の病気）に霊験あらたかとされた。その結果、首塚大明神として祀られ、現在では学業成就の信仰も集めている。首と脳が結びつけられて、現代の学力の守護神とされているのである。いまでも全国から参拝者があるという。

首塚大明神の鳥居横にある手を清めるためのお水場の石造りの桶には「奉納 皇紀二千六百年」（1940）と刻まれている。説明板は昭和61年（1986）三月とあり、記念碑には、「昭和六十一年三月 社殿 鳥居 擁壁等 完工」と記されている。恐らくは同年に祠の徹底的な整備と伝説の再確認がなされたようである。昭和59年（1984）10月11日付で、この祠は宗教法人として認められているので、制度化に伴って整備が行われたと推定される。この日を持って、首塚は首塚大明神として神格化されたのである。

首塚大明神の社殿の周りの大きな木々は所々はがされている。参詣者が首塚大明神周辺の木の皮をはぎとって、お守りとして持ち帰るそうだ。『山州名跡志』巻九では松木を削って飲むと安産とあるので、その慣行が現代風に解釈し直されて健康のお守りになっているのであろう。首から上の病気に効くので、特に枕の中に入れると効果的だと言われる。

現代では、首塚大明神は神霊スポットとして人気を集めている。例えば、インターネットの神霊スポットをまとめたサイトなどには「鳥居をくぐると呪われる」「心霊写真がよく撮れる」という噂が見られる¹²⁾。

首塚大明神の世話をしている氏子の人数は決まっていない。平成22年（2010）4月15日に行われた例祭関係者の名簿は10人で、そのうち山名姓の人が7人いるので、同族を主たる担い手とする氏子がこの祠を守っていると言ってもいい。例祭のときに奉納される幟などには「氏子一同」と書かれ、この人々は首塚大明神の「氏子」ということになっているが、以前祠の近くで茶店や旅館をやっていた家の子孫だそうである。『桑下漫録』によれば、首塚周辺に二七軒の茶屋集落があった。現代の行政区分上では、首塚大明神は京都市西京区に位置するが、氏子には京都市の住民は皆無で、ほとんどが隣の亀岡市篠町王子に住んでいる。総代は山名薫氏が務めている。山名という苗字は、この地域の歴史に登場する名前、室町時代に山名時氏（1364年-1371年）と山名氏清（1371年-1391年）が丹波国の守護となっている。現在の氏子の山名氏がその子孫かどうかはわからない。現在の氏子の年齢は中年から80代までである。一番年輩の人でも子供の時から首塚大明神にお参りしていた記憶もっていて、子供時代は頻りに掃除に来ていたと言っている（現在は一年に一度、例祭の前の直近の日曜日に掃除が行われる）。

首塚大明神の例祭は4月15日である。祭りを務める宮司（西田利弘氏）は三代目だが、首塚大明神の宮司としては二代目で、20年前からこの祠の宮司となっている。以前は神社というよりも小祠であった。宮司は多くの神社で祭事を務めており、首塚大明神におまいりに来るのは一年に一度、例祭の日だ

けで、合わせて17の神社の宮司を兼務している。宮司は昭和16年（1941）生まれで、その父も首塚大明神の宮司を務めていた。

平成22年（2010）4月15日の例祭は午前8時に始まり、20分ほどで、その後は、参詣者のための祈祷が行われた。祭式の順序は普通の神社の祭祀と変わらない。式次第は修祓（お祓い）、宮司一拝、献饌、祝詞、玉串拝礼、撤饌、宮司一拝、直会である。祝詞は、宮司自身が書き、二年ぐらい経てば、作りかえるという。祝詞は全部で五種類あって、一般的に神道の祭祀に用いられる定型の大祓詞と祓詞、と宮司自身が首塚大明神の例祭のために創作する祝詞（首塚大明神春乃例祭祝詞、首塚大明神祈願祝詞、首塚大神御守祈願祝詞）がある。首塚大明神祈願祝詞は祈祷の際に使われ、参詣者の名前と来た場所を入れて読み上げられる。首塚大明神専用の祝詞の内容は主に参詣者とその家族の健康を祈る。

供え物は神道祭式での一般的なもの、米、酒、塩水、餅、青果物、菓子類等である。ただし、酒呑童子の名前に「酒」の字が入っていて、酒が好きで、酒のせいで滅びたと伝えられるように、酒呑童子と酒の結びつきが強いので、やはり酒の供物が一番多く、社殿の後ろにある首塚に酒をかけるというのもこの祭りの独特の場面である。

例祭の参詣者は、京都市、亀岡市、大阪府、滋賀県、兵庫県、岡山県からの関西圏の人々が見られ、毎年合わせて80人ぐらいが集まるそうだが、朝から午後3時ごろまでの間に、数人でお参りしては帰る。祈祷は何回か行われ、祈祷の終了後、参詣者は社殿の後ろの首塚に向かって、その上にお酒をかける。

祈祷を希望する人は「御祈祷札」に住所、氏名と年齢を書き、そこに社務所印が押される。祈祷料（お札・供え物付き）は定められていて、3000円かかる。また例祭の日に社務所の建物でお札（300円）、お守り（200円、袋入りは500円）と供え物（茶菓子、200円）が売られている。また供え物として月桂冠のお酒が売られていて、適当な量を首塚にかけたりして、供えたら、持ち帰ってもいいということになっている。お札やお守りは、例祭以外の日でも、京バス老ノ坂停留所付近の民家で売っている。

4. 首塚大明神についての考察

(1) 首塚

首塚とは、簡単に定義すると、首だけを埋葬した墓である。遠藤秀男の『日本の首塚』[遠藤1973]によれば、日本全国で113基の首塚が確認されている。古文獻には載っているものの、現地では確認できないものを除けば、106例である。由来が忘れられたり、国土開発などによって首塚が消滅したりすることがみられるので、その数は少なくなっていく。遠藤は首塚を次のように分類する。

1. 合戦による戦死者首塚

- A. 姓名の判明する個人塚 37例（平将門・曾我義仲・新田義貞・楠木正成・今川義元・明智光秀など）
- B. 多数合葬（群集）49例（関ヶ原・川中島・長久手・分倍河原などの古戦場に残る首塚）
- 2. 暗殺や要人の処刑首塚 12例（蘇我入鹿・平重衡・源実朝・護良親王（大塔宮）など）
- 3. 罪人（一般人）の首塚 5例（由比正雪・丸橋忠弥・日本左衛門など）
- 4. 人間以外の首塚 3例（鬼の首塚）

首塚の大部分は合戦によるものであるということが分かる。これは戦場で敵の首を取る武士の「首狩り」の慣習と関係している。獲得した首が勝利の証拠品とされ、その数と軽重によって位級が得られるようになっていた。

他には、首は怪奇をあらわす怨霊となるという考え方もある。すでに言及した平将門の首がその例である。蘇我入鹿についても首が飛んだという伝説がある。崇りかねない首を鎮め祀る必要があると思われる、首塚に対する鎮魂と祭祀が続けられたからこそ、現在まで残っている首塚がある。さらに、首が生前の独自の個性や人格をあらわし、特別な力を持ち、それを祀れば、守護神に転換すると考えられていたことも重要である。老ノ坂の首塚にもその傾向は認められるが、昭和59年（1983）には首塚大明神、祭神を鬼王・酒呑童子として宗教法人の登録を認可されたことで、制度的上でも神に転化したのである。

(2) 鬼の首と鬼の首塚の伝説

首塚大明神として祀られる酒呑童子の首塚は、分類4、「人間以外の首塚の3例（鬼の首塚）」に当たる。鬼という首の持ち主自体が伝説的な存在であるので、分類4は1、2と3と違って、実際に首が埋められているわけではなく、伝説によって首塚と伝えられる。（もっとも、1、2、3の分類でも、伝説のみによってある人物の首塚と伝えられるものがある。）酒呑童子の首塚は『日本の首塚』の本文では言及されているものの、同書の首塚所在一覧には含まれていない。著者が当時それを現地で確認できなかったのだろうか。一覧に含まれているのは、岐阜県伏見合渡と中村の間（現在の岐阜県可児郡御嵩町中、国道21号沿い）に所在する「鬼の首塚」のみである。この岐阜県可児郡御嵩町にある鬼の首塚に関する伝説は本稿で扱う首塚大明神の伝説に似ている。内容は大体次のようなものである。鎌倉時代の建久・正治の頃（1190-1200）、強盗の男が岩窟に住み着き、里人を困らせていた。彼は西美濃の不破の関生まれだったため、「関の太郎」とか「鬼の太郎」と呼ばれていた。この地の地頭が家臣四人に太郎の退治を頼んだ。太郎を倒した四人は、その首を検分のため京都へ運ぼうとしたが、この地で首が急に重くなり、進めなくなったため、ここに埋めたという〔小泉2004: 263〕。首を京都に運ぶ途中、それが動かせないほど重くなり、その場で埋めたという展開は首塚大明神の由緒伝説とそっくりである。これを一つのモチーフとして捉えることができる。しかし、岐阜県可児郡御嵩町の鬼の首塚の伝説は、鬼の首ではなく、鬼と呼ばれた人間の首に関するものであると指摘しなければならない。

『日本の首塚』の中で言及されている鬼の首に関する伝説は、さらに三つある。一つは江戸時代の随筆集『新著聞集』にみえる三河国鳳来寺（現在の愛知県新城市の鳳来寺）の話である。鳳来寺の仙人が鬼を仕えていた。仙人は年をとって、もし自分が死んで、鬼だけが残れば、人々は恐れて、寺に来なくなると思った。そこで、鬼に自分より先に成仏するように頼んだ。鬼はうなずき、仙人に首を打ち落とされた。寺の工事中にその鬼の首と思われる大きなドクロが見つかった。これは鬼の首の話ではあるが、首塚の話ではない。

明治時代に出版された井出道貞著『信濃奇勝録』によれば、長野県上高井郡須坂町（現長野県須坂市）の鬼の首塚は、長い間何の塚か分からなかったが、江戸時代中期に掘りおこしてみると、中から額の真ん中に一つ穴があいているだけの一つ眼のドクロが出てきた。以来塚を「一つ目鬼塚」と呼ぶようになった。

坂上田村磨の伝説には鬼退治と切られた鬼の首の扱いに関するものがある。坂上田村磨に切られた鬼

の首が二日路ほど離れた鬼首村まで飛んでいったという相原友直著『平泉雑記』(1751)に載っている話や坂上田村磨が退治した鬼の死体を首・胴・手足に分け、三ヶ所に埋葬し、そこに観音堂を建立した〔佐々木1979〕などの話である。これらもやはり鬼の首に関する話ではあるが、首塚の話ではない。

遠藤が提示した鬼の首塚の3例は、岐阜県可児郡御嵩町の鬼の首塚、酒吞童子の首塚(本稿のテーマ)と長野県上高井郡須坂町(現長野県須坂市)の鬼の首塚のことであろう。ただし、長野県須坂市にあるはずの首塚は文献には登場するものの、現地では確認できない。

『日本の首塚』で言及されているもの以外にも、鬼の首に関する伝説と鬼の首塚がある。長野県下高井郡木島平村の照明寺の参道の入口に鬼の首塚と呼ばれる石がある。伝説によると、村人を悩ませていた鬼が、鬼退治で味方してくれた稲妻に打たれ、頭と胴がちぎれて死んだ¹³⁾。この石がその鬼の頭という。岐阜県郡上市和良町の念興寺には鬼の首(角のついたドクロ)がある。藤原高光によって退治された瓢ヶ岳の鬼の首であるという¹⁴⁾。さらに、各地に「鬼」の字が入った地名が多数あるが、「鬼塚」「鬼首山」「鬼首」のような地名は、由来が分からないものもあるが、鬼の首の伝説と関係していると思われる。

首塚大明神の由来伝説はユニークなものではなく、各地に伝わる鬼の首と鬼の首塚の伝説のバリエーションであると言える。見てきたように、鬼退治の伝説に、副伝説のように、打ち取った首の運命に関する伝説が付き加えられる場合が多い。鬼の首が他の身体の部分に比べて、特別のものとしてされるのは「首狩り」の慣習と関係していて、鬼の首塚を作ることによって鎮魂と祭祀を行うのも首狩りに発した首の供養の慣習にさかのぼる。

(3) 歴史と伝承

首塚大明神には歴史的な背景もある。

歴史的背景の第一は、交通の要衝としての老ノ坂である。大枝山は山城と丹波の国境にあり、京都から丹波・山陰方面へのただ一つの主要道路が通っていた関門に当たる。大和から河内・摂津・山城を経て丹波・山陰の国々に通じる道がいわゆる「山陰道」で、老ノ坂のあたりでは「丹波路」と呼ばれていた。続日本紀に「大枝をもって五関の一となす」とある。室町時代には天龍寺所管の関所が設けられ、老ノ坂城も設けられた。多くの人々がこの交通の要衝を往来していたので、特に宿場として栄えた。近世では峠ノ里(峠町)の集落が形成されて、丹波の特産品を扱う市が立ったという。歴史上の出来事としては、記紀に登場する四道将軍の一人丹波道主命^{たんばみちのぬしのみこと}、一の谷の平家を攻めに向かった源義経、六波羅に攻め入った足利尊氏、織田信長殺害のために本能寺を目指した明智光秀などもここを通った。

大江山は歌枕でもあり、登場する歌には旅路を歌ったものが多い。一番有名な歌は小式部内侍の作品である。

大江山生野の道の遠ければ まだふみもみず天の橋立 (小式部内侍『小倉百人一首』60番、『金葉集』雑上1・550番)

『万葉集』(巻10, 7031)にも大江山の歌がある。

丹波路の大江山のさな葛 絶えむの心吾が念はなくに

老ノ坂が交通の要衝であったことから、様々な情報が行き交い、茶屋や旅籠の人々の間に蓄積されていった。特に丹波路にあるもう一つの大江山と通じる交通路に位置していたことから酒呑童子伝説が相互に連携して生成したと考えてもいいだろう。

明治になってからは老ノ坂の峠道とまた別に道が出来て、トンネルや橋がかけられた。現在ここには国道9号線が走っていて、巨大な老ノ坂亀岡バイパスも貫通した。これによって旧峠道は人がほとんど通らなくなり、ひっそりした場所になってしまい、酒呑童子伝説は以前の意義を失ったが、若者が訪れるパワースポットとしての新しい意味合いを与えられつつある。

歴史的背景の第二は、盗賊征伐との関係である。多くの旅人が通っていた大江山は盗賊の出没するところであった。黒澤明が『羅生門』として映画化した芥川龍之介の短編小説「藪の中」は、大江山の盗賊について語られた話、『今昔物語集』第二十九卷第二十三話の「具妻行丹波国男於大江山被縛語」を基に書かれている。夫婦が大江山の辺りで若い男に襲われる話である。また『今昔物語集』卷第二十九第二十五話「丹波守平貞盛、兎干を取る語」は、平貞盛が、自分の秘密を隠すため、息子に大江山の盗賊のふりをして、山路で自分を治してくれた医者殺すように命令する話である。これは大江山に盗賊が出没するのが一般的に認識されていたことを物語っている。これを裏付ける史料も残っている。例えば、「法家問答」と呼ばれる史料には、商人が大江山山中で20人の強盗集団に襲われ、借りていた馬まで取られたと書かれ、馬の貸主が弁償を求めているのに対してどうすればよいか、という発問がある（『平安遺文』三四五号）。他には、永久2年（1114）には、丹波・因幡などの国の人、30人ぐらいが組んで強盗を働いていたという白河上皇への報告がある（『中右記』同年九月三日条）。峠という場所は物騒な場所で、危険に晒されているので、そこを通る者は神仏の加護を祈って通るといった境界の場であった。

室町時代以降は、大江山に天龍寺に属する兵士所が置かれ、治安がよくなった。佐竹昭広の提唱〔佐竹1992〕以来、酒呑童子伝説の背景に史実の山賊征伐があるという説が広く述べられてきた。『丹波志桑田記 陵墓並塚之部』には、酒呑童子の首が埋められた塚としての首塚の由来が記述されているが、酒呑童子は「実ハ盗賊ナリト云」〔亀岡市史編さん委員会1996: 645〕と付け加えられている。貝原益軒なども「酒呑童子は古の盗賊なり、夜叉の形をまねて人をおどし、人の財宝を奪ひ、人の婦女をかすむ」（『諸州めぐり西北紀行』巻上）と述べている。実際、延応元年（1239）、鎌倉幕府が大江山の盗賊の鎮圧をその地の地頭に命じている（『中世法制史料集』第一巻 追加法一一八）。

老ノ坂という場所に関わる歴史的背景が想像上の人物である酒呑童子を实在化させる力となったのである。

(4) 道祖神信仰と地蔵信仰との関係

首塚大明神のある老ノ坂は、峠と坂で構成される境界の場であった。丹波と山城の間の大江山は、古い書物には「大枝山」とか「於伊ノ山」とも書かれ、「老ノ坂」という地名は、そこから転化してきたのだろうと言われる〔永光1983: 2〕。転化してきた地名であっても、「老ノ坂」はやはり、老人という人生の最後を生きる人々の行くすえを表すような意味があり、境界としての性格がはっきりしている。さらに、かつては、出産は他界から招き入れられると観念されていたから、ここはあの世とこの世の境界とされ、安産に関わる子安地蔵が祀られていた。一方では、坂や峠はしばしば賽の河原と重ね合わされ、地蔵は賽の河原で鬼から責め苦を受ける子供たち、特にいじめられる親に先立った子供たちを救う

地蔵菩薩である。地蔵や塚には死者に関連する要素があり、出産は他界からやってくる子供、賽の河原の地蔵は他界に送りかえす子供をイメージしているとすれば、酒吞「童子」に結びついて不思議ではない。首塚大明神の起源伝説では、酒吞童子の首を老ノ坂より先に持ち運ぼうとする頼光らが、地蔵尊に止められることになっているが、これによっても老ノ坂という場所に境界性が付与されていたことは明らかである。

一方、高橋昌明が『酒吞童子の誕生』[高橋2005(1992)]で指摘したように、酒吞童子の原像は疱瘡をはやらす疫神であり¹⁵⁾、酒吞童子退治伝説形成の背景にあったのは山賊の征伐ではなく、四^し堺^{さかい}祭^{まつり}だったとする説が有力である。中世の日本では、境界は辻、橋、坂や交通路上の「点」のような形で存在し、魑魅魍魎が出没する空間として意識されていた。境界は疫神がよく出現する場所とされ、この世とあの世の中間の役割を果たして、病気や災いをもたらす鬼が入るのを防ぐ道祖神祭が行われた。「不浄」を嫌い、様々な禁忌に取り囲まれて生きてきた天皇を抱える京都は、清浄性を維持し王城を鎮護することが強く要請されたので、境界の儀礼は重要であった[伊藤1995]。四つの境のうちでも、老ノ坂は京都の西方に位置し、仏教風に言えば西方浄土の方位で、神仏が習合しやすい重要な境界になっていった。

四つの境は、平安京のある山城国に入ろうとする魔物を祭り鎮める四堺祭という一種の道祖神祭の祭場だった。老ノ坂以外の三つの境は、主要な街道沿いにあり、逢坂(滋賀県大津市逢坂山)、山崎(京都府大山崎町大山崎・大阪府島本町山崎)、和邇(滋賀県大津市和邇)である。そこは王城の京都にとっての内と外の境界の場で、旅する時にはどうしても辿らざるを得ない場所であった。道祖神はまさしく「道の神」で、境界である坂や峠に祀られて旅人の安全祈願や、赤子の誕生祈願、安産の祈願、そして子どもの成長も願った。

首塚大明神とともに老ノ坂に祀られている子安地蔵は、鬼の首のような不浄なものを王城としての清浄性を保つために京都へ持ち込まないようにと阻止したとする伝承があり、不浄なものを食い止めるという機能は、老ノ坂の境としての位置付けやここを祭場とした四堺祭の目的と重なる[高橋2005(1992):61]。首塚大明神の元々の姿は道祖神だったのかも知れない。道祖神は賽の神とも言われ、疫病を防ぐだけでなく、旅行く人の安全を守ったり、子授けの神でもあるという多くの機能を持っていた。かつて道行く人々は、峠の神に供物を手向けて様々な祈願をした。手向の神として峠に祀られる道祖神は数多い。首塚大明神が健康に関わる神様であることはその一部の機能なのであろう。

老ノ坂の首塚大明神について考察するに当たって、老ノ坂の東方にある逢坂の関蟬丸神社上社と関蟬丸神社下社が手掛かりになりうる。双方は京都の「西の坂」と「東の坂」であり、「老の坂」と「逢坂」の響きも似ていて、多くの共通点がみられる¹⁶⁾。すでに述べたように、逢坂は老ノ坂と同じように、四堺祭の祭場の一つであり、京都という王城を「外部」の不浄から守る場所にあった。ここは東海道及び東山道の入り口で、山城国の近江国との国境に当たる。現在、逢坂には、蟬丸神社、関蟬丸神社上社と関蟬丸神社下社という蟬丸を祀る三つの神社がある。蟬丸神社は関蟬丸神社の上・下社に遅れて成立した分社である。蟬丸(生没年不詳)とは、宇多天皇の皇子敦実親王の雑色とも、醍醐天皇の第四皇子とも伝えられる平安前期の伝説的な歌人である。盲目で琵琶に優れていて、逢坂山に住んでいたと言われる。世阿弥作の謡曲『蟬丸』では、盲目のため逢坂山に捨てられた皇子蟬丸は、そこで髪が逆立つ奇形の姉、逆髪(さかがみ)と再会し、お互いの悲しい運命を嘆き、慰め合う。上社は逆髪を祀るともいう。蟬丸と逆髪は、いずれも王権から追放された貴種であり、盲目や逆髪という負の属性をもつ両義的なも

ので、典型的な「貴種流離譚」である。老ノ坂と逢坂に祀られる「坂神」は道祖神であり、両方の坂は王権の秩序を守るために行われた四堺祭の祭場ともなった。応永年間（1394-1428）成立とされる『寺門伝記補録』には、上・下蟬丸神社について「二所同じく道祖神（ちがえしのかみ）を祭る、もつて関所の鎮め神たり」と言われる。「関」という境界に関わって両社が道祖神信仰と関連して成立したということである。その道祖神とは、もともと坂上には猿田彦命、下には豊玉姫命で、男女二神の双体道祖神だった。この男女二神に対する信仰が蟬丸と逆髪という弟と姉についての伝説と重なったと思われる。「逆髪」はもともと「坂神」だったのである〔服部2009〕。首塚に対する信仰も昔の道祖神信仰とそれより遅く発生した伝説が混淆した結果であると推測できる。

境界の神は、道祖神から地蔵へ、そして酒呑童子の首塚へと想像力を展開させて、現在に至っている。酒呑童子の首塚は首塚大明神となり、通常の神社に昇格した。伝説の生成と変容は古代以来の政治や宗教の記憶を引きずる境界の場を、最大限に活用して展開してきた。重層的で混淆する民俗の変容は今後も継続していくかどうかは分からないが、変化する過程に注目することで民俗の想像力の原理を説き明かすことが出来るだろう。

注

- 1) 「シュテン童子」の表記は「酒天童子」・「酒典童子」・「酒伝童子」などもあるが、本論文では「酒呑童子」と統一する。引用の場合は引用文献通りにする。
- 2) 酒呑童子の研究史に関しては、〔高橋2005（1992）〕〔佐竹1992〕〔小松1997〕などを参照。
- 3) 2010年4月15日の首塚大明神例祭に際して、宮司西田利弘氏及び山名勲氏を初めとする氏子の方々からの聞書を基にする。
- 4) 『大江山絵詞』をはじめとする室町時代の絵巻が残っている。室町後期に入ると、酒呑童子の物語が奈良絵本（彩色の挿絵を入れた写本）などの題材となり、江戸時代には絵入り版本が作られるようになった。
- 5) 佐竹昭広は、伊吹山の酒呑童子伝説は大江山の酒呑童子伝説より後に発生したと考え、その契機は、凶賊の柏原弥三郎伐採（建仁元年（1201）五月九日）の事件であったと推測している〔佐竹1992: 104〕。
- 6) 酒呑童子退治の前日譚を語る物語には「伊吹童子」の話もある。「伊吹童子」は、東洋大学蔵絵巻（1）、国会図書館蔵絵巻（2）、大英博物館蔵絵巻（3）と赤木文庫旧蔵絵巻（4）がある。（1）・（2）・（3）の内容は酒呑童子が伊吹弥三郎（スサノオノミコト）に退治されたヤマタノオロチが変じた伊吹大明神）と大野木殿の娘の子で、生まれた時に髪が伸びていて、歯が揃えたりする性質を持つ鬼子として生まれ、山中に捨てられるが、山の神に守られながらたくましく育つ。（4）では、酒呑童子は捨てられるのではなく、比叡山に預けられるが、鬼おどりを演じていた鬼の面と衣装のまま酒を飲み、寝てしまう。面がとれなくなり、鬼になる。
- 7) 日本の鬼の交流博物館（編）1996、2001などに収録されている。
- 8) 白慧（坂内直頼）撰の22巻本の地誌で、元禄年間に実地踏査を行い、神社・仏閣・名所旧跡の由来、縁起等を記した。
- 9) 『桑下漫録』前編五も同様で、『盪魚』を引いて、佐伯郡司秋高の娘の桜姫が難産で亡くなり、恵心僧都を頼んで塚の前で経文を読むと現れ、仏像を彫って祀れば産婦を助けると告げたので、榎の木で延命地蔵を作って供養したという。寛文元年（1661）の刊本『子易物語』の子安地蔵の由来に「丹波の国、大江の坂に、一人の長者あり、佐伯の長者とぞ申ける」とあるのに通じるという〔大島2008b: 18〕。
- 10) 句読点は筆者による。
- 11) 埋めた理由は、首に根が生えていたためか、首の腐敗が進んでいたためともいう。
- 12) インターネットで心霊スポットをまとめたサイト <http://www.k4.dion.ne.jp/~sinrei/>（2010年4月10日アクセス）などを参照。
- 13) 木島村観光協会公式サイト <http://www.kanko-kijimadaira.com/>
- 14) 和良観光協会のホームページ <http://gujo-wara.jp/>
- 15) 疫神の多様な展開については、〔大島2008a〕を参照されたい。

16) 「おう」は「会う」に繋がり、頻繁に行きかう人々との出会いの場所の意味もあろう。

参考文献

- 赤坂憲雄2002『境界の発生』講談社。
 市古貞次(校注)2009(1986)『御伽草子』下 岩波書店。
 伊藤喜良1995『中世王権の成立』青木書店。
 遠藤秀男1973『日本の首塚』雄山閣出版株式会社。
 大島健彦2008a『疫神と福神』三弥井書店。
 大島健彦2008b「老ノ坂の子安地蔵」『西郊民俗』203号, pp. 16-21。
 亀岡市史編纂委員会1965『亀岡市史中巻』亀岡市役所。
 亀岡市史編さん委員会1996『新修 亀岡市史 資料編第四巻』京都府亀岡市。
 亀岡市神職会(編)1985『故郷鎮守の森 亀岡神社誌』南郷書房出版部。
 小泉吉永(翻訳)2004『古地図・古文書で愉しむ江戸時代諸国海陸旅案内一海 改正日本船路細見記・陸 諸国道中旅鏡 全(古地図ライブラリー)』人文社。
 小松和彦1997『酒吞童子の首』せりか書房。
 小山直嗣1996『新潟県伝説集成〔下越篇〕』垣文社。
 コジューリナ, エレーナ2009「現代における民俗の活用に関する一考察-新潟県燕市の『越後くがみ山酒吞童子行列』を中心として-」『人間と社会の探究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』69号。
 佐々木 徳夫〔ほか〕1979『宮城の伝説』「日本の伝説40」角川書店。
 佐竹昭広1992『酒吞童子異聞』岩波書店。
 篠田浩一郎1978『中世への旅 歴史の深層をたずねて』朝日新聞社。
 新谷尚紀2003『日本人の禁忌』青春出版社。
 「大索」『日本法律史話』1943ダイヤモンド社。
 高橋昌明2005(1992)『酒吞童子の誕生—もうひとつの日本文化』中央公論新社。
 波平 恵美子1985『ケガレ』東京堂出版。
 波平 恵美子(編)1991『伝説が生まれるとき』福武書店。
 『日本「鬼」総覧』1995歴史読本特別増刊 事典シリーズ23, 新人物往来社。
 日本の鬼の交流博物館(編)1996大江町発足45周年記念限定出版『鬼力話伝45』大江町役場総務企画課。
 日本の鬼の交流博物館(編)2001大江町発足50周年記念限定出版『鬼力話伝 其の弐』大江町役場総務企画課。
 永光 尚1983『亀岡百景』南郷書房出版部。
 服部英雄2007『峠の歴史学-古道をたずねて-』朝日新聞社。
 服部幸雄2009『宿神論—日本芸能民信仰の研究—』岩波書店。
 林屋 辰三郎・上田正昭(編)1987(1961)『篠村史』臨川書店。
 藤岡 謙二郎1967『都市と交通路の歴史地理学的研究—わが国律令時代における地方都市及び交通路の歴史地理学的研究の一試論』大明堂。
 六車由美2003『神, 人を喰う』新曜社。
 村井康彦1991『京都・大枝の歴史と文化』思文閣出版。
 山田現阿1994『絵巻 酒吞童子—越後から大江山へ—』考古堂書店。
 横山 重・松本隆信(編)1976『室町時代物語大成 第三』角川書店。

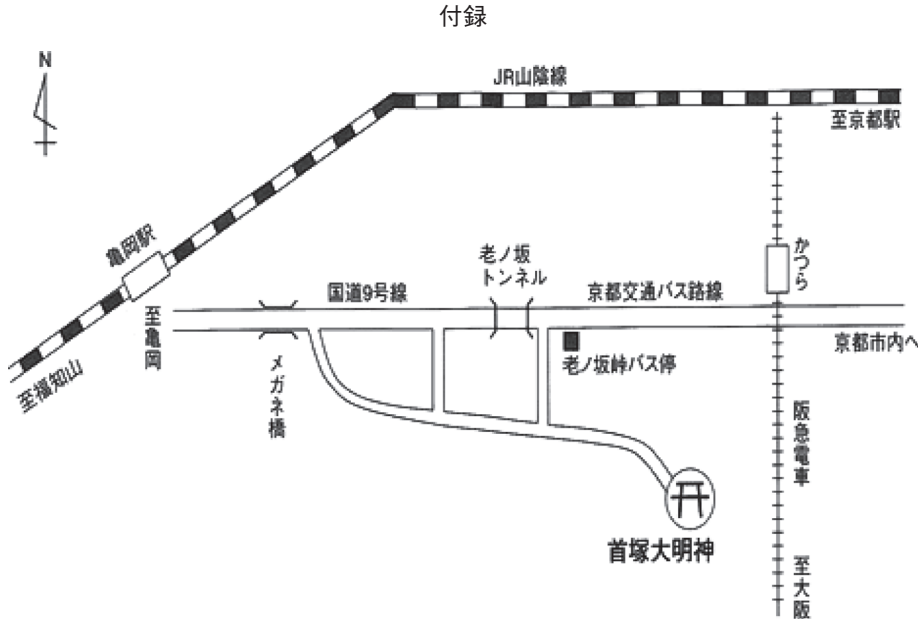
参考新聞記事(京都新聞)

- 1998.04.16 朝刊17版 23頁 丹波版『酒吞童子首塚に学業成就を願う 老ノ坂の「大明神」例祭にぎわう』
 1998.12.15 朝刊17版 26頁 京総合面『ふるさとの道はいま 老ノ坂峠(亀岡市篠町—京都市西京区)』
 1999.04.16 朝刊17版 25頁 丹波版『境内に日本酒の香り漂う中・・・参拝者でにぎわう 老ノ坂・首塚大明神の例祭』
 1999.04.18 朝刊17版 26頁 京総合面『ものがたりと出会う(41) 御伽草子「酒吞童子」首塚大明神(京都市西京区大枝沓掛町) 人々の心のよりどころ』

2000.04.16 朝刊16版 26頁 丹波版『参拝客ら病の治癒願う 老ノ坂峠 首塚大明神で例祭』

2004.04.17 朝刊 24頁 丹波A『口丹2004 首塚大明神 首から上の厄よけ祈願』

2010.01.29 朝刊 21頁 市民版B『中村武生さんとあるく洛中洛外 西京区(2・完) 都の入り口・山陰道 本能寺へ、明智勢直進』



首塚大明神の位置（首塚大明神社務所パムフレットより）



首塚大明神の様子（2010年4月15日筆者撮影）